

間も眠るやつが、五時間くらいでもピタッと起きてしまうのである。そういう体になっているのがまことに不思議だ。

睡眠時間が足りなくても起きてしまうのは週末に楽しいことが待っているからだろう。年間ほとんどの週末を、競馬場で過ごすようになってもう十五年になる。競馬場に朝から駆けつけるためにはぐっすり寝ている暇はない。たとえば九時に東京競馬場に行くためにはこの仕事を八時には出なければならぬ。となると支度もあるから七時には起きることになる。前夜、二、三時まで仕事していても七時には起きなければならぬ。すると不思議なことに、目覚ましをかけてもその目覚ましで鳴る直前にぴたっと起きるのである。十五年の間に、体がそうになっている。

今週は福島競馬場に行く予定で、本日の午前中の新幹線で福島入りするのだが、まさか二時間で目が覚めるとは思ってもいなかった。いくらなんでも

早すぎる。

若いときと異なるのは、そういう週末はどこかに無理があるのか、月曜がひたすら眠いことだ。若いときなら土曜に徹夜しても、日曜の夜にたっぷり寝れば、月曜はまた徹夜しても平気だったが、この歳になるとそうはいかなくなる。だいたい金曜と土曜を睡眠時間四〜五時間で過ごすので、日曜にたっぷり寝ても、一日では元に戻らないのである。

会社勤めの知人に聞くと、四〜五時間の睡眠は当たり前というが、なにしろこちらは、通常は十〜十二時間も寝ているのだ。そういう人間に四〜五時間は極端に少ない。

時には金曜の夜に完徹して、そのまま競馬場に直行し、それでも土曜の夕方にすぐソファに横になればいいが、親しい仲間と週に一度酒を飲むのも楽しみで、そうすると土曜の夜は五時間くらいの睡眠になる。通常なら二日間で二十四時間も眠るやつが、週末になると二日間で五時間なのだ。これでは

もたない。

だから月曜の夜は、晩飯を食べ終えた途端に眠くなる。で、その日はたっぷりと眠ることになるのだが、問題は火曜になってもまだ眠いことだ。若いときなら一日で回復しても、ただいまは数日かかってしまう。これがいちばんの問題だ。

というのは毎週土日は競馬のためにいつさい仕事を入れず、ということは月曜から金曜までの五日間しかないということだ。誰も同情してくれないが、私にとつて一週間は五日間なのである。月曜の夜に仕事が出来ないとそれが四日間になり（原稿を書くのは夜なので）、火曜がつぶれると三日間になってしまう。これでは仕事が出来ない。

とかなんとかこの原稿を書いているうちに時計の針は六時に近づいてきた。まだ少し早いけれど、これからシャワーでも浴びて支度すれば、ちょうどいい時間になるだろう。さあ、楽しく、時には辛く、濃いドラマがいっぱい詰まっている週末の始まりだ。

小説・江戸神仏歳時記 (13)

新井薬師 (梅照院)



郡 順 史

中野区の新井町にある梅照院は、江戸時代のもっと昔から、通称「新井薬師さん」とよばれ、その名を知られ多くの参詣人を集めていた。(東都歳事記)

その理由は、何ととっても眼病と小児病に抜群のご利益があると信じられていたからである。

「しかし本当にこのお薬師さん、そんなに繁昌していたのかな」

梅照院さんの門前に立って、同行のカメラマンが小首を傾げて呟いた。

「物の本にそう書いてあり、事実ひとに尋ねても同じ答えが返ってくる。なんでそんな疑問を持ったんだい？」

「だって今でこそJRの中野駅からも、西武電車の新井薬師駅から徒歩で十分か五分という近間にあるけど、それにバスもある。しかし江戸時代は、中野の新井村といえは、江戸校外、文字通りの片田舎、お詣りするんだって一日がかり、時には一泊どまりなんだよ。それにさア」

「まだあるのかい？」

「江戸の市中にだって、本所の(川上やくし)、四谷の(朝日やくし)、目黒の(たこ薬師)とちよっと数えただけでも二十や三十有る、そしてそれぞれにご利益が有ると信じられている。理屈で考え

たつて、何も遠い所へ足を運ばなくとも、近い所
 でお願ひしたほうが楽ぢやないかな」

「はっはは。それは君が信心というものが判つて
 いないから、安直に考へるんだ。信心しご利益を
 いただこうとするには、苦勞したほうが有難味が
 増し且つご利益が得られる、と信じられてゐるん
 だ。さあ、我々は現在には眼病も病氣持ちの子供も
 持つていないが、將來も病氣にならないようお願
 いしに行こう」

二人は顔見合せてお寺の山門をくぐつた。

このお寺のご本尊は、葉師如來と如意輪觀音と
 さいている。天正十四年（一五八六）に行春とい
 う真言密教の行者によつて建立されたという。天
 正十四年という年は、豊臣秀吉が天下を統一して
 大阪城を築いた三年後である。今を去る四百二十
 年の昔。以來、平成の今日まで、今見る風景の如
 く參詣人が絶えないというゆゑ、ただただ感嘆の
 ほかはない。

そしてこのお寺の建立にかかわつて、他のお寺
 とはちよつと相違した異色の伝説がある。それを
 お寺で頒布している葉によつて紹介してみよう。

ご本尊の二体は二仏一体で高さ一寸八分の黄金
 仏という。弘法大師の作で、鎌倉時代、新田義貞
 で有名な新田家の代々の守護仏となつていた。が、
 南北朝時代のある夕、尊像を納めた城の仏間から
 光が放たれ、その光が消えると同時に尊像も忽然

と消え失せてしまつた。いくら探しても無く、そ
 のまま行方不明となつてしまつた。

それから二百年ほどたつたある日、相模國（神
 奈川県）で修行してゐた行春という若い僧が、新
 井村をおとすれ、こんこんと湧き出る清澄な泉を
 見て（新井村の名の由來）「この地こそ真言密教の
 行をなすにふさわしい土地」と觀じ、さつそく草
 庵作りにとりかかつた。

と、草庵の左の柱のかたわらの梅の古木からに
 わかに光りが放たれるのを見た。

行春はちよつと通りかかつた農民を呼び止めて、
 「この梅の古木から不思議な光りが發せられてい
 ますが、見えますか？」

と訊いた。自分の錯覺からと思ひ、たしかめた
 のである。ところが老農夫は、

「いえ、何も見えません」

と首をふつてさつさと行つてしまつた。

行春もやはり自分の眼の錯覺だつたのか、と思
 い直して庵の建築にとりかかつた。

ところが次の日も、その次の日も、梅の古木は
 不思議な、淡いながらも光りを放ち続けるのであつ
 た。そして更に奇怪なことに、その光りは、行春
 にだけ見え、通行人など土地の人間には見えない
 のである。

行春は勇氣をふるつて、光りを放つ幹のところ
 だけを繰り抜いてみた。すると葉師如來と如意輪

観音の二仏一体の黄金の尊像が出現したのだった。あつ、と行春は腰を抜かさかんに驚いた。が、すぐにこの尊像は、かねて話に聞いていた大師様がお作りになり、上州の新田家の守護仏となっていたが、ある日忽然とお姿を消し行方不明になっている尊像に相違ない、と氣がついた。

行春はさつそく広く寄進を求め、尊像にふさわしい立派な堂を建立し安置し、梅照院と名づけた。この不思議な話を聞いた徳川二代將軍秀忠は、折から眼病に苦しんでいた第五子の和子（後の東福門院）の祈願させ、見事完治してより、代々徳川家の篤い信奉と貢献をするようになったという。

二

しからばこの新井の薬師さまは、いかなる病氣に対してご利益があるのであろうか。

いずこのお薬師さまも、その第一のご利益は、眼、と言われている。むろん新井のお薬師さまも眼に関する種々の不都合を治して下さる。そしてその他に、子供の病氣も軽いものなら治して下さる。それゆえもう一つ別名に「子育て薬師」との評判もある。但し重篤な小児病はどうなのだろう。小児科の先生も匙を投げたというような難病は、これは「順天」つまり天の下された運命に従うということになるのではなからうか。

そもそも「子育て薬師」という別称がつくようになったのは、梅照院第五世玄鏡が、元和三年（一六一七・大阪夏の陣が終り、徳川の天下になって三年目、徳川家康が死んだ翌年）の或る早朝、玄鏡が経をあげていると、にわかに夢うつつとなり、その夢うつつの中に薬師如來さまがあらわれ、小児薬の調剤の法を教えて下された。それというのもこの辺一帯に小児の病いが流行り、親たちが困っていたのを薬師さまが氣の毒に思われたからだ、と伝えられている。

ともあれこの玄鏡の調剤した「小児薬」が想像以上の薬効をあらわし、たちまち人々のあいだに弘まり、従って求める者多く、いつか「子育て薬師」というようにもなったという。

しかし何と言っても、いづこの薬師さまと同じく、新井の薬師さまも、そのご利益の最たるものは、「眼」である。遊び紋に、「め・め」とあるように「眼」が強調されている通りである。

この眼、眼病が完治したという伝説、挿話はあまたある。

その中の一つを取り上げてみよう。

皆さんご存知の浄瑠璃「壺坂靈驗記」の話とよく似ているが、まずこの話を簡単にしてみよう。

ある所に沢市という盲人の男がいた。その沢市の眼を何とかどのように治してやろうと、女房のおさとが甲斐々々しく面倒をみ、眼に効くとい

う神社やお寺に連れて行つて共に祈願し、ついに神仏を動かし沢市の眼が治つたという、おさとの貞節、信仰心をたたえた物語である。

信心の篤い江戸期の人々は、この物語を事実として素直に受けとり、神仏にすがつたものだった。さて、新井薬師さんの「靈験記」であるが、この新井村から一里ほど離れたところに大窪村というところがあった。

その大窪村にお菊という三十一歳になる女がいた。彼女は、お月という五十八歳の姑と、三歳になる自分の男の子の金太というのと三人で長屋住まいをしていた。亭主の留吉は、一昨年のはやり病で急死してしまい、従つて以来彼女は縫い仕事一つで二人を養っているのである。

そんな或る日、姑のお月が、
「眼が痛いよ、痛いよ」

と、幼児のように掌で顔をおおつて叫び出した。お菊が「どれどれ見せてごらんなさい」と掌のけて覗きこんだが、むろんわかるわけは無い。今日なら近所の眼医者へ大急ぎで連れて行くところであるが、当時は、ましてや田舎、眼医者など居ない。それに第一町医者は診察治療費が高い、とうてい長屋住まいの庶民には手がとどくものではない。

ちよつと当時の物の本を覗くと、町医者の診療費は、こちらから行つて診て貰つて最低一分ほど、

往診して貰うと、徒歩で二分二朱から二分、駕籠に乗つて来ると最低三分はとられるという。(一分は一両の四分の一)

当時一両あれば裏長屋住まいだが、親子三人暮らして寝酒もちよこつと飲めたとある中での一、二分である、如何に大金か予測がっこうというものだ。

赤ヒゲ先生みたいな貧乏人をタダで診てくれるような義侠心の有る医者など、小説の世界ならとにかく、現実にはいかなかったのだ。

結局、お菊は、新井薬師さんのお袖にすぎることにして、姑とわが子の手を引いてお参りした。往復二時間ほどの距離と時間だが、それも毎日となると、稼ぎにもひびき、苦勞になる。だがお菊は、そんな苦勞は姑には片鱗も見せず、やさしく労わりお参りする。

「すまないね。世話ばかりかけちゃつて。私なんか本当は死んじやたらいいのに。」

「何言つてるのおつかさん。私や金坊にとつておつかさんは大切な人なのよ。私、一つも苦勞なんて思つていないんだから、変なこと言わないで。お薬師さまと一緒に一生懸命お願いしましょうネ」
こんな嫁姑の会話が續いた。

近所でもお菊の姑孝行ぶりは評判で、「本当によく出来たお嫁さんだよ」と、みんなに好意を持たれ、温い眼で見られていた。

こうした状態が一ヶ月ほど続いたある小雨の降る日、お月が、

「お菊さん、今日は私一人で行くよ。あんたは家で仕事をしておくれ」

と言い出した。あきらかに雨降りを気にしてお菊と金太へのいたわりと遠慮である。

「何言ってるのおつかさん。もし途中で転んだりしたらどうするのよ。その方が余程心配よ。おつかさん、私たちに氣を使つことなんか無いのさ、お参りに行きましょう」

かくていつもの如く姑嫁孫の三人は、手をつないでお薬師さまへ眼病祈願のため家をあとにしたのだった。

そして遂にお月に奇跡が起つたのである。

三

前にも少しふれたが、そもそも新井という地名は、寺の境内の一部から、香ばしく匂うほどの清らかな湧水が出ており、村人たちからその井を、「竜の水」とか「いつも新しい薬水」と呼んでいた所から付けられていた。

寺ではその泉を仏様のくだされた聖水「仏泉」とよび、独占することなく、村人や信者みんなに、飲料水や、洗水として自由に使わせていた。

お月は薬師さまに着くと、いつものようにまず、

口や手指を清めるため「仙泉」のほとりに寄り、柄杓をとって握った。

そのとたん、どうした事かお月は、唐突として嫁のお菊の優しい言葉を思い出し、思い出すと同時に、両眼からどつと、嬉しいのと有難いのと感謝との涙をあふれさせ、つい柄杓を持った手を空に止めてしまった。

と、これもいつもはそんな事をしないのに、孫の金太が、

「ばあばア、どうしたの？」

と声をかけながら腰にしがみついていた。

そのとたん、お月はよろけ、はずみで手にした水の一杯入った柄杓を、おでこへぶつけてしまった。顔中水だらけになる。

更にお月はそれだけでなく、前のめりになり、御手洗へ顔を浸けてしまい、顔だけでなく、首から襟もとまで水浸しにしてしまった。

お菊があわてて走り寄り、金太を叱ってからお月へ、

「おつかさん、大丈夫、苦しくない!」

と、後から肩を抱くようにして声をかけた。

お月は半身を起して直立し、ほんの少しほっとしていたが、不意に、

「お菊さん、お菊さん、大変だ、大変だよ!」

と叫び声をあげて、周囲を見廻すようにした。

「どうしたの、おつかさん! 眼がつぶれちゃった

の！」

「そうじゃない。その反対だよ。眼が、少しも痛くなくなったの、その上、少しぼつとだが、見えるようになったよ」

かくてお月の眼は、快癒のきざしを見せ、旬日を経ずして完治したという。

むろん何故そうなったのか、人々には判らない。しかし信ずる人々は、「お薬師さまのご利益のおかげ」と、固く信じて疑わず、この噂が更に弘まり、新井のお薬師さまへの参詣、祈願する人がいや増したという。

「へーえ。話としては面白いが、しかし本当かな、うまく出来すぎているよ」

同行のカメラマンが、この話を聴いて、薄ら笑いを浮かべながら小首を傾げた。

「そうね、君のように全く信心氣のない男には、眉唾に思えるだろうね。でも、かの武者小路実篤先生は、「心に信を持たない男は不幸と言える」と言っているよ。信ずるも信じないも、心と知性の問題だよ。君の勝手」

「勝手か。じゃあ、あの水をペットボトルに入れて持って帰ろうかな」

「持って帰ってどうするんだい」

「市販の目薬以上に効くよ、って売りまくるんだ」
「バカ、それじゃ詐欺と窃盗を同時に犯すようなものじゃないか。第一お寺さんは、あのお水を眼

に効くとは言っていないぞ」

「あっ、そうか。じゃあやめておこう」

二人は声を合せて笑い、それからあらためて仏堂に向い、丁寧に礼拝してからお別れをしたのであった。

何かすがすがしい気分になっているのを自覚していた。これもお参りしたご利益の一つであろうか――。



■千枚田／小豆島町（表紙説明）

「耕して天に至る」と形容される棚田は、稲を育てるだけではなく、山から流れ出す水を蓄えてダムの役割を果たすなど、国土の保全や災害の防止にも寄与してきた。中山の千枚田では、地域の人々によって耕作管理や復田などが積極的に行われており、昔ながらの棚田の景観が残されている。

「酒林」随筆特集 第七十二号

平成十八年十一月一日号

発行人 西野 信也

印刷人 太陽印刷株式会社

発行所 西野金陵株式会社

高松市亀井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、「一報下さい」。